

「事業名：飯舘村における農業再生と風評被害払拭のための教育研究プログラム」 2020年度事業の概要

東京大学 連携市町村：飯舘村

連携市町村との協定締結日：平成30年3月5日 現地拠点：福島県相馬郡飯舘村佐須滑87

事業のポイント

事業提案者は、原発事故の3か月後から飯舘村に赴き、NPO法人や農家と協働で独自の農地除染法を開発し、作物の試験栽培を実施してきている。活動の中で、放射能汚染地というハンデを背負った飯舘村の復興には、単なる技術的な除染やインフラの物理的再建だけで終わらず、その先に新しい日本型(小規模世代間交流型)農業の創設にチャレンジする若者の育成が必要であることを痛感した。本事業では、学生を対象とした飯舘村の現地見学会や教育研究活動を展開し、風評被害を払拭する取り組みを進めると同時に、震災直後から蓄積されてきた知識(大学が有する復興知)を現場の課題解決と研究活動に展開するFPBL(Field & Project Based Learning)を実践的に試みる。

2020年度の活動内容

- (1) 農村復興を実現するための教育プログラム(飯舘村における現地体験と意識変化の評価)
全国各地の大学生を招聘し、現地における多様なステークホルダー(農家、通いの住民、移住者、道の駅、村役場など)との交流や村内見学、ワークショップを含めるフィールドワークプログラムを実施する。基本的な二日間の構成としては、まず初日に村内見学を行い、二日目に「飯舘村の農村復興を考える」ワークショップを行う。また、前年度において発展した「大学-村間(お手伝い)プラットフォーム」の確立と「飯舘村復興メディア」をまとめる。なお、本ワークショップの全行程は、Twitterの「#までい大学」で検索することで、追えるようにする。
- (2) 農業再生のための研究プログラム(飯舘村における実地研究とラボ実験による多面的研究)
水田の放射性セシウム分布状況を調査し、斜面から水路への放射性セシウムの流入について調査する。降下物の農作物への影響についても検討する。また、ダイズの放射性セシウム吸収に関する分子生物学的な検討として、生育全般を通じてのセシウム吸収に関する遺伝子の探索を行う。そして、根近傍のセシウムやイオンの挙動を詳細に明らかにし、粘土鉱物の影響を明らかにする。



フィールド調査およびワークショップの様子



傾斜地からの放射性物質流出調査

取り組みによって得られる成果

- ・全国各地から募集した学生を飯舘村に連れて行き、「現場を見ることの重要性」の実感と現場の課題に根付いた研究活動の展開を考えさせ、また大学の社会的価値と地域復興のあり方を考える機会を与える。
- ・山村に多い地形(斜面等)からの放射性セシウムの流入の寄与や降下物の農作物汚染の影響が分かる。
- ・ダイズの放射性セシウム吸収に関する分子生物学的なメカニズムが解明され、安全なダイズ栽培を目指す。
- ・根近傍域での水、イオン動態の粘土鉱物の影響が分かり、精緻なモデル化が実現する。